

〈研究ノート〉

# 大学院進学希望者の 受験準備の現状と課題

—— 大学院生の振り返りインタビューから ——

浅井 尚子

## 要 旨

近年、大学院に進学する留学生が増加している。拓殖大学別科日本語教育課程においても大学院進学を希望する留学生が増加傾向にある。拓殖大学別科日本語教育課程においては、大学院進学希望者を対象に、選択必修科目の中に大学院進学クラスを設置し、進学指導を行い、大学院進学後に必要な能力の育成を図っている。しかし、クラスの中で、研究テーマが分からない、あるいは研究計画書が書けないといった学生が一部に見受けられた。本研究では、本別科を修了した大学院生にどのように大学院受験準備をしたか、また、どのような大学院生活を送っているか、半構造化インタビューを行い、分析を行った。その結果、本別科在学中と現在の大学院生活でいくつかの困難点が明らかになり、大学院生の大学院受験時の心理や現在の心理が浮き彫りになった。

キーワード：予備教育、大学院生活、困難点、克服法

## 1. はじめに

グローバル化が進行し、日本企業においてもグローバル人材の確保が急務の課題となっている。高等教育機関は、高度グローバル人材としての留

学生を日本社会へ送り出す重要な役割を担っている。

菅長・中井（2017）は、高等教育機関についての役割について以下のよう  
に述べている。

高等教育機関において各自の専門分野の論文執筆をし、研究発表を  
した経験が論理的な思考能力やプレゼンテーション能力磨くことにつ  
ながり、それらは、入社後、直接活かせる能力になると考えられる。  
高等教育をきちんと消化・吸収し、いわゆるアカデミック・ジャパ  
ニーズを身につけた上で、専門教育を自分のものとすることが、グ  
ローバル人材として社会に出ていく基礎になると言える。

高学歴社会の中で、高等教育機関である大学院教育においても大学院で  
の実践的な教育・即戦力育成が重視される傾向にある。

### 1.1 拓殖大学別科日本語教育課程の現状

留学生の大学院修士課程入学者数は年々増加している。文部科学省『平  
成 29 年度学校基本調査概要』（2017）によると、留学生の大学院修士課程  
入学者数は、平成 29 年、8,659 人で全体に占める割合は 11.8%である。  
平成 26 年 7,666 人（全体に占める割合 10.5%）、平成 27 年 7,789 人（10.8  
%）、平成 28 年 8,225 人（11.4%）と増加傾向にある。

拓殖大学別科日本語教育課程（以下、本別科とする）においても大学院  
入学者数は、上記文部科学省（2017）と同様の傾向にある。本別科の平成  
24 年度から平成 28 年度の修了生全体における大学院進学者数をまとめた  
のが、表 1 である。（%は、全体に占める割合）

平成 26 年度は、秋入学<sup>(1)</sup>を開始した年度であり、修了生総数が増加す  
るとともに、「大学院進学者数（研究生・聴講生を含まず）」も急激に増加  
している。その後、平成 27 年度と 28 年度は 8%台であるが、平成 24 年

度と比較すると、明らかに増加している。この数は、進学者の実数であり、実際に大学院を受験した留学生の人数はさらに多くなる。大学院進学希望者は、ここ数年、本別科においても増加傾向にあることがわかる。

表 1 拓殖大学別科日本語教育課程・留学生別科<sup>(2)</sup>における大学院進学率

年度	修了生 総数	大学院進学者数 (研究生・聴講生を含む)	大学院進学者数 (研究生・聴講生含まず)
H24	68 名	6 名 ( 8.8%)	3 名 ( 4.4%)
H25	46 名	8 名 (17.3%)	3 名 ( 6.5%)
H26	75 名	13 名 (17.3%)	10 名 (13.3%)
H27	81 名	(研究生・聴講生 0 名)	10 名 ( 8.1%)
H28	74 名	8 名 (10.8%)	6 名 ( 8.1%)

## 1.2 本別科における大学院進学クラスについて

本別科では、日本語の選択必修クラス科目として「コース別日本語」を設けている。コース別日本語クラスは、週 2 回月曜日の 3 限と水曜日の 3 限の 2 コマ、計 180 分が時間割に組み込まれている。学生は、進路の希望や目的によって、履修する科目を選ぶ。2017 年現在、「入門漢字・N4（日本語能力試験 N4 受験のためのクラス、以下同様）・N3・N2・N1・拓殖大学進学・大学院進学クラス」が開講されている。本別科では、「大学院進学クラス」で大学院進学希望者のサポート行っている。

筆者も、このクラスの指導に携わってきた。大学院受験情報の提供や研究計画書の書き方の指導などを行ってきた。しかし、大学院進学希望者が増加する中、自分の研究に真剣に向き合うことがないまま、ブランド力のある大学院を目指し、希望する大学院であれば、どの研究室でも構わないといった受験テクニックだけを学ぼうとする学生も出てきている。このよ

うな学生たちに対して、どのように指導していったらよいのだろうか。

そこで、本稿では、実際に大学院生たちが、受験準備をどのように行い、大学院生活をどのように送っているか、現状を把握し、また、どのような問題を抱えているのか、困難点を明らかにする。そこから、今までの指導の見直しを図るとともに、今後の適切な指導に役立てていきたいと考えた。以下、2で先行研究について調査し、3では、インタビュー調査の概要について記す。4ではインタビュー結果を事例としてまとめ、その上で、5で困難点についての分析結果・克服法についての提案を行う。6で今後に向けての改善案を提案する。

## 2. 大学院進学希望者の受験に関する先行研究

大学院進学希望者がいる予備教育機関は、大学の学部・大学付属の別科・日本語学校・専門学校等がある。

研究生・聴講生や学部の留学生の困難点について述べた論文は比較的多い。大学院進学希望者に限ったものではないが、留学生の日本での生活の困難点について、それぞれの大学で、多様な面から調査が行われている。

菅長・中井（2017）は、東京外国語大学の学部留学生のインタビュー調査で語られたエピソードを中心にまとめ、予備教育段階で、勉学上の困難点の克服の方法を伝え、人間関係構築を促す提言を行っている。また、横浜国立大学の藤井・門倉（2004）の調査では、学部留学生の困難点として、経済的な問題が大きく、アルバイト・奨学金・住居等に関係し、それが学習面に影響を与えているとしている。宮城（2003）では、大学での勉強の意味を理解し、目的意識をもって勉学に励むためには積極的に周囲にアプローチするなどのコミュニケーション能力が必要であるとしている。社会人大学院生を対象にインタビューを行った出相（2016）も「実際に入学している者がどういった経緯で進学を希望するようになり、そこでどう

いった障害に直面し、それらをどのように乗り越えて入学に至ったのかといった過程についての知見を得ることが重要となる。」と述べている。

大学における大学院進学希望者の研究では、満都拉（2012）や河原・森他（2016）などが挙げられる。満都拉（2012）は、中国の大学生の大学院進学意識に関して、親の期待・大学受験のあり方の影響・エリート意識の3点を指摘している。

日本語学校や留学生別科における大学院進学希望者に関する研究は、授業実践報告や教授法及び教材研究などが多い。大学院進学希望者の勉学上や人間関係における困難な点を明らかにした研究は、ほとんど見当たらない。そこで、本研究は、大学院生の本別科在学中および、現在の大学院生活での困難点と克服方法について質的研究をしていくことにする。

### 3. インタビュー調査の概要

#### 3.1 研究目的

大学院生の本別科在籍中と現在の大学院での困難点および、克服法を明らかにすることを本研究の目的とする。そのために大学院生による振り返りインタビューデータを分析し、本別科における指導を高めるための資料とする。

#### 3.2 調査概要とデータの収集

2017年8月の1ヶ月間、データ収集のため、インタビュー調査を実施した。調査協力者は、2014年から2016年の間に、本別科において、1年～1年半の予備教育を受け、その後大学院に入学した私費留学生9名である（表2）。なお表中、「大学院学年」列のMは修士課程を、算用数字は在籍学年を示す（以下同）。

表2 調査協力者の背景

		年齢	性別	出身地	大学院学年
1	調査協力者A	20代後半	男性	漢字圏	M1
2	調査協力者B	20代後半	男性	漢字圏	修了
3	調査協力者C	20代後半	女性	漢字圏	M2
4	調査協力者D	20代後半	女性	漢字圏	M2
5	調査協力者E	20代前半	女性	非漢字圏	M1
6	調査協力者F	20代後半	女性	非漢字圏	M1
7	調査協力者G	20代前半	女性	非漢字圏	M1
8	調査協力者H	20代後半	女性	非漢字圏	M2
9	調査協力者I	30代前半	女性	非漢字圏	M2

インタビューは、筆者1人で行い、調査協力者1人につき、1～2時間程度、平均約1.5時間、実施した。形式は対面式で、半構造化インタビューを行った。インタビューを行う直前に、調査協力者にこの調査の目的、結果の扱い、および、個人情報公開の可能性について伝え、承諾を得た。また、答えたくない質問には答えなくてもいいことを確認した。筆者は、聞くことに専念し、調査協力者の語りをできるだけ遮らないことを心がけた。調査協力者全員の同意を得、ICレコーダーに音声録音するとともに、質問紙で記録を取った。録音した音声データを筆者自身が全て文字化し、書き起こしたデータをもとに分析を行った。

本稿執筆にあたり、後日、改めて、調査協力者全員にインタビュー内容を振り返ってもらい、個人情報公開の許可を取り、掲載の承諾を得た。

### 3.3 調査方法

調査協力者9名へのインタビューの質問項目は以下の通りである。

- 1) 日本の大学院を選び、現在の大学院に入った理由

- 2) 現在の研究テーマを選んだ理由
- 3) 入学時の研究テーマと今の研究テーマについて
- 4) 大学院受験の経緯
- 5) 大学院受験の困難点と克服方法
- 6) 大学院受験で、印象に残っていること
- 7) 今の大学院生活と入学前のイメージの相違
- 8) 大学院入学前に身につけておいたほうが良いこと
- 9) 大学院進学を目指す留学生へのアドバイス

9名によるインタビューデータを質的データとして、今回の調査に用いることにする。データについては、SCAT (Steps for Coding and Theorization) (大谷 2007, 2011) を参考にした原田 (2014) の分析方法に従い、分析する。

SCAT は、一つだけのケースのデータやアンケートの自由記述などの比較的小規模の質的データの分析に利用される分析法で、コーディングがなされる。原田 (2014) は、データを SCAT に倣い、セグメント化し、データの着目すべき語句（テキストの中に下線）とテーマや構成概念のコード化をデータに付している。本稿も小規模データのため、SCAT の手法を取り入れた原田の分析方法を取り入れ、分析する。

また、大谷は SCAT が誰にでも活用できるように、データの入力用のフォームを公開している。本稿でもそれを用いて作成したマトリックスを元に事例データを分析の一部を取り上げ、問題点を検討する。

問題点の中で、勉学上・人間関係における困難点とその克服法について述べている点を抽出し、その上で、菅長・中井 (2017) の「エピソードから見る困難点と克服方法」に従って、分類し、考察する。菅長・中井 (2017) が対象としているのは、留学生が大学入学後に直面した困難点とそれをどのように克服したかという分類である。筆者が分析対象としてい

るのは元別科生の大学院受験、大学院入学後という点であるが、困難点と克服法について、予備教育という点では、共通する点が見いだせるのではないかと考え、採用した。

菅原・中井（2017）は、次のように述べている。

留学生の多くは、日本の大学に進学後、様々な困難に直面する。そして、そのような留学生を支援するための方策が各大学で模索されている。もちろん、入学後のそれらの支援は留学生にとって欠かせないものであるが、入学前にも困難に対処する準備ができていることが望まれるのではないだろうか。予備教育期間中にきちんとそれだけの準備ができているかどうか、また、どのような教育がより効果的であるのかは、確認、検討に値する。

菅長・中井（2017）の分類方法は、まず、留学生が直面する困難点を1. 勉学上の壁と2. 人間関係構築上の壁の2つに分類し、その上で表3のように、困難点に対する克服法を分類している。

表3 困難点に対する克服法

①	時間（時間とともに克服した）
②	きっかけ（他者やものとの関わりがきっかけとなり克服に結びついた）
③	努力・工夫（自分なりに努力・工夫して克服した）
④	援助要請（他の人に助けを求め、他者の援助を得て克服した）
⑤	その他（上記に当てはまらないもの） <sup>(3)</sup>

最初にデータから、日本への留学の経緯についてまとめる。その上で、上記2つの留学生が直面する困難点を抽出し、それぞれ本別科に在籍中、および、研究生だった時と現在の大学院生活での事例の2つに分ける。そ



の上で、困難点に対する克服法を当てはめ、分析する。

下記に文字起こしの参考例を示す。

〈参考例〉 S：調査協力者 T：インタビュアー

発話者	テ ク ス ト	構成概念
T	大学院に入る時にいろいろ調べたと思いますが、どうい うところから調べて、受けようと思った？	
S	情報源なら、CINII で、自分に合った論文を探して、その 論文を書いた先生の名前を探して、どこかの大学大学の所 属とか、連絡、メールアドレスとかもらって、そしてそ の先生に連絡を取ります。	情報を得る 手段
T	先生とのコンタクトはどれくらい取りましたか？	
S	最初は数回ありますけど、受験に関する本とか、わかり ましたから、あとは連絡取らなかったと思います。最初の 数回ですよ。いろいろな問題がありますから、 <u>もち ろん実は直接に面談が必要だと思います。一回だけでい いです。面談です。はい。</u>	指導教官 との コンタクト
T	面談をしてから変わりましたか？	
S	そうですね。面談が終わってから、心の中でたくさん の問題が全部解けました。先生からの情報は何か自分で <u>調べたことより、なんか多いと思います。</u> 先生は私の態 度や話し方やそれを通じてなかなか自分ができるかでき ないかだいたいわかります。だから私にとってその一回 だけの面談が、重要なことだと思います。先生の態度を 見て、先生は学生をほしいかどうか、だいたいわかりま す。そして、もしほしいなら、時間が無駄にならないと 思いますから。なんか一生懸命に勉強してそれは大丈夫 だと思います。	面談による 疑問点の 解消

## 4. 調査結果

### 4.1 調査協力者 A の事例（20 代後半 男性 漢字圏 M1）

〈日本留学・大学院進学の際について〉

大学のとき、日本語に興味を持ち、友達に誘われて、日本語の塾に通った。大学卒業後、仕事はしばらくしたくないと思い、日本で進学しようと考えた。

	困難点	克服法
別 科 在 籍 中	<b>1. 勉学上の壁</b> ずっとアルバイトをやっていたので、経済的な問題はなかった。しかし、受験が近づくにつれて、時間的には厳しかった。バランスを取ることが難しいと感じた。	<b>③努力・工夫</b> 受験の年の前半は余裕があるので、アルバイトを多めにやってお金を貯めた。後半は少しずつ減らし、勉強の時間を確保した。
	<b>1. 勉学上の壁</b> 専門が変わって新しい知識を短時間で覚えなければならなかった。自学自習で指導者がいないから、わからない部分は誰にも聞けない。どのように勉強すればいいか、それすらわからない状態だった。別科にいる時、研究計画書に時間をかけるより、もっと専門の勉強をすべきだった。大学院進学クラスの先生で工学系の分かる先生がいなかったの、アドバイスも少ないし、先輩も探しにくかった。	<b>④援助要請</b> 指導教官とコンタクトを取り、試験内容や分からない部分を聞いた。過去の入試問題が公開されていない大学院だったので、研究室訪問がなかったら、絶対に合格できなかった。研究室訪問・面談で心の中の問題や・疑問点がすべて解けた。一回でいいが、研究室訪問・面談は非常に重要だと思った。自分で調べるより先生の情報の方が多い。
	<b>1. 勉学上の壁</b> 国立大学院受験に失敗して、夏休みに突然目標がなくなった。次に別の国立大学院を目指し、研究室訪問もするが、自分の日本語能力と専門知	<b>②きっかけ</b> 後期の授業が始まって、皆が一生懸命勉強しているのを見て、自分ももう一度試してみようかと思った。その後私立大学院を目指す。研究室訪

大学院生活		識のなさであきらめる。何をすればいいか全くわからなくなった。とても辛かった。留学で、親戚からたくさん借金していたので、親の言う通り文系にしようかとも思ったが、あまり、何も考えられなかった。	問を機にやる気になった。試験当日、寝坊し、遅刻するというアクシデントはあったが、とにかくあきらめず、最後まで頑張った甲斐があり、私立大学院に合格できた。
	<b>2. 人間関係上の壁</b>	両親は大学卒業後、すぐに就職してほしかった。私はすぐには就職しなかった。もっと勉強したいと思った。また両親は文系に変わってほしかった。その方が就職しやすいと思っていた。それから、両親は日本で就職してほしいと思っている。日本の方が給料はいいし、安定していると思っている。	<b>⑤その他</b> 外国へ行って、新しい挑戦をしたいと思い、留学した。私は、日本の事情が分かっているから、帰国し、国の会社でも日本の会社でもいいから就職したい。
	<b>2. 人間関係上の壁</b>	研究室で同国人がいないので、他に聞く人がいない。先輩がいないし、同国の同期生もいない。	<b>④援助要請</b> 先生に聞くのが一番いい。でも先生は忙しいし、「まだ時間があるから大丈夫。」という。困った時は他の研究室の博士課程の同国人に聞く。
	<b>1. 勉学上の壁</b>	専門も変わったので、多くの問題がある。研究の方向性や進め方がわからない。	<b>③努力工夫</b> 自分では、時間がないと思う。自分ではなるべく早く課題をこなすようにしている。

#### 4.2 調査協力者 B の事例（20 代後半 男性 漢字圏 修士課程修了）

〈日本留学・大学院進学の経緯について〉

国の大学で2年間、日本語を勉強し、その間、1年間交換留学で日本に留学した。そこでの経験によって、もう一度留学したいと思うようになった。当初は大学院ではなく、理系の大学に進もうと考えていた。留学試験が良くなかったため、文系の大学院を目指した。

	困難点	克服法
別科 在籍中	<b>1. 勉学上の壁</b> 今の大学院の前に国立の大学院を2つ受験し、不合格になった。	<b>④援助要請</b> 先生からのアドバイスをもらい、改めて研究テーマを検討し、研究の方向性が決まった。
	<b>1. 勉学上の壁</b> 大学の時も卒論は日本語で書いた。研究計画書は、母国のネット調べて、書いた。大学でも「論文の書き方」という科目があったので、形式はわかっていたが、内容が難しく感じた。自分の考えをいかにうまく相手に伝えるか悩んだ。また、専門の試験で、ことばの解釈のようなものがあり、推測はできないので、暗記しなければならなくて、それが一番大変だった。	<b>④援助要請</b> 最初に自分で書いて、その後先生に見せて、思考錯誤を繰り返しながら書いた。 <b>③努力工夫</b> 専門の勉強は、自分のことばで簡潔に表現、答えられるように過去問を分析し、練習した。
大学院 生活	<b>2. 人間関係上の壁</b> 家族は早く帰国してほしいようだった。特に父と祖母が強く望んでいた。そばにいたほうが、私がお金に困ったり、人間関係に悩んだりしたときもサポートができると思ってくれている。	<b>③努力工夫</b> 母国にいると見えないことがたくさんある。情報量も違うし、せっかく3～4年海外で勉強したのだから、海外で就職しなければ、意味がない。就職活動を日本で始めた。
	<b>1. 勉学上の壁</b> 論文を読んで、自分が同じように書けるか自信がなかった。自分の研究テーマは、新しい分野なので、参考文献も少なく、有意義な研究な研究にするにはどうしたらいいかという点が難しかった。	<b>③努力工夫</b> 自分の考えるテーマの特殊性は何かについて、要約して、理論化した。実習もやってみた。

#### 4.3 調査協力者 C の事例（20 代後半 女性 漢字圏 M2）

〈日本留学・大学院進学の間緯〉

もともとアニメが好きで、大学の時、アニメ・ラジオと本で日本語を勉

強した。大学も日本語を学びたかったが、親の意向で心理学を専門にした。卒業後1年、心理学を教える専門学校で教員として働いたが、日本に行きたいという気持ちが強くなった。

	困難点	克服法
別科在籍中	<b>1. 勉学上の壁</b> はじめは、私立の他の大学院を受ける予定だった。しかし、その大学院は、私が受ける年から、試験内容が変わって、TOEICなどの英語の資格が必要になった。	<b>⑤その他</b> 私は、英語の資格を持っていないので、あきらめた。
大学院生活	<b>1. 勉学上の壁</b> イメージとは違って楽しい。授業は思ったより少ないし、先生方もやさしくて、冗談をよく言う先生もいる。	<b>④援助要請</b> わからない時は会った時に先輩や友達に聞く。
	<b>2. 人間関係上の壁</b> 分からないことは、会った時先輩に聞くが、メールなどでは聞かない。先輩たちとはそんなに親しくないから。先輩たちもいろいろ忙しいから、迷惑だと思う。	<b>④援助要請</b> 友達にメールで分からないことを聞く。

#### 4.4 調査協力者Dの事例（20代後半 女性 漢字圏 M2）

##### 〈日本留学・大学院進学の間緯〉

母国の大学でデザインを専攻し、大学卒業後、デザイナーとして働く。もともと、日本のデザインに興味があり、日本へ行き、自分の目でデザインを見たいと思っていた。最初は、日本語を勉強して日本で働きたいと思っていた。別科で勉強しているうちに専門をもっと勉強したいと思い、大学院進学を決意した。

	困難点	克服法
別科 在籍 中	<b>1. 勉学上の壁</b> 別科の生活は楽しかった。ただ、試験が近づいてすごく神経質になって、毎日が心配だった。	<b>④援助要請</b> 映画見たり、おいしいものを食べたりした。それから、恋人がいたから、彼に相談した。
研 究 生 生 活	<b>1. 勉学上の壁</b> 研究生の時、ほぼ毎日作品を作っていた。作品が認められるかどうかは非常に重要である。先生の講評で褒められた時はいいが、だめだと言われたときは辛かった。また新しいテーマを決める時が、辛くて難しかった。いつも自分には才能がないのかと思い、3か月くらいぼーっとしていた。自分と戦っていた。	<b>①時間 ③努力工夫</b> 今は大丈夫。受け入れられる。自分がやれるところだけ、集中するというモードに変わった。
	<b>2. 人間関係上の壁</b> 母国にいる時は、自分はたぶんトップの位置にいた。国では、競争がありません。しかし、日本の美大に入ってから、自分はすごい人間ではない、年をとったと感じた。そのギャップが大きかった。自分より若くてすごい子がいると自分のプライドを傷つけられ、「イヤー」という思いがあった。	<b>①時間 ③努力工夫</b> 今は大丈夫。受け入れられる。自分がやれるところだけ、集中するというモードに変わった。
大 学 院 生 活	<b>2. 人間関係上の壁</b> 自分は高校から美術やってきているが、他の人は大学の専門を変えてきた人がけっこういる。その人たちが私よりすごい作品を出してきた時、嫌だと感じた。すごく壁があって、乗り越えるのは大変だった。日本に来て本当に違う世界に来たと感じた。	<b>②きっかけ ③努力工夫</b> 大学院は保護がない。自分の作品に集中し、自己管理が必要。同時に自由だと感じた。先生は教えない。作品を持って行って、それに対してのアドバイスやみんなで話し合いをする。 <b>①時間</b> 今は、大人の仕事をしている感じ。大丈夫。今の大学院のデザイン研究科は抜群で、日本一と思える存在なので。

<p><b>2. 人間関係上の壁</b> アルバイトで、外国人の美術大学院受験塾の講師をやっている。学生の中には大学の時の専門ではないが、学歴がほしいだけで、大学院受験をする人がある。ちょっと変だと思う。</p>	<p><b>②きっかけ</b> 大学院は自分が何かをやりたい、研究したいことがある人が行くべきところ。大学とは違う。</p>
--	--

#### 4.5 調査協力者Eの事例（20代前半 女性 非漢字圏 M1）

##### 〈日本留学・大学院進学の経緯〉

中高生の時に日本のアニメやドラマを見ていて、日本語には抵抗がなかった。日本語が好きになった。大学の時の専門が日本語だったが、日本語教師は大変だと感じ、また、他の専門を勉強したいと思い、大学院を目指して留学した。

	困難点	克服法
別科在籍中	<p><b>1. 勉学上の壁</b> 大学の専門と大学院の専攻を変えたのは、大学時代のアルバイトの苦い経験があったため。母国で、アルバイトで日本語教師をやったが、学生が不真面目。試験を一生懸命作っても「もっとやさしい問題にしてくれ」と言われ、授業中はスマホばかりいじっていて、話を聞かない。わけがわからなかった。それで、専門を変えた。大学の専門と違うので、専門用語がわからなかった。</p>	<p><b>③努力工夫</b> 専門を変えたので、わからない言葉が多く、いちいち調べないといけなくて非常に大変だった。</p>
	<p><b>2. 人間関係上の壁</b> 出願の時、提出書類をそろえるのが遅くなって、ぎりぎりになって提出した。出願後に先生とコンタクトをとったら、「提出したのなら、会う必要がないのでは？」と返事が来て、メールから非常に怒っているのではないかと感じた。ちょっと怖かった。試験の面接の時もドキドキした。</p>	<p><b>⑤その他</b> 結果的に合格したのでよかったが、前もって準備したほうが良い。</p>

	<p><b>2. 人間関係上の壁</b></p> <p>週3回くらいコンビニでアルバイトをやっていた。始めたころは、ストレスがたまった。仕事に慣れず、店長と客から文句を言われた。注文されたものを間違えるとか、客が言ったことがわからないとかそういうこと。落ち込んで自信がなくなった。</p>	<p><b>①時間</b> だんだん慣れてきて、今は問題ない。</p> <p><b>②きっかけ</b> 両親を思い出して、頑張らなくてはいけないと思った。</p>
<p>大学院生活</p>	<p><b>1. 勉学上の壁</b></p> <p>高校の時は理系だったので、レポートを書くのが得意ではなくて、大変。毎日、勉強、研究。本を読むだけ。想像より、ちょっと大変。どういう風に書けばいいのかよくわからない。参考文献もあまりない。具体的に書きたいことは多いが、何を書くかまだ決められない。</p>	<p><b>④援助要請</b></p> <p>先生に相談したこともあるが、あまりよく分からず、また、相談する時間もない。先輩や友人にも分野が違っているので、相談できない。先生には「2年まではテーマを変えてもいい」と言われた。</p>
	<p><b>2. 人間関係上の壁</b></p> <p>授業がバラバラなので、友達がなかなかできない。別科の時は、皆同じ授業を受けて、クラスが本当に楽しかった。今は他の国の人が多くて、同国人があまりいない。話すチャンスがないまま、次の授業になって違う教室に移動する。授業終わったら、すぐ帰る。4か月たつけど、今でも友達ができていない。</p>	<p><b>④援助要請</b></p> <p>苦しくてたまらない時に相談するのは、国の高校・大学時代の友達。ラインやフェイスブックで。両親はいつも心配して、「生活費足りる？ 足りなかったら送るよ。」と言ってくれるけど、心配かけたくないから、相談しない。同国人で日本にいる友人もいるので、時々会って話す。</p>

#### 4.6 調査協力者Fの事例（20代後半 女性 非漢字圏 M1）

〈日本留学・大学院進学の間緯について〉

子どもの時、すごく日本の漫画が好きで、特に「ドラえもん」をよく読んでいた。「おしん」や「トットちゃん」も好きだった。大学では日本語を専門にし、大学卒業後、6年間、国の日系企業で働いていた。しかし、上司は同国人なので、母語ばかりで、日本語を使うチャンスがありません



かった。毎日が同じでつまらなかった。ずっとこのままの人生を過ごしたら、もったいないと思い、日本の大学院へ留学しようと思った。

	困難点	克服法
別 科 在 籍 中	<b>1. 勉学上の壁</b> 母国にいる時、日本語の発音は問題がないと思っていた。日本に来て、自分の日本語が日本人に通じなかったことにショックを受けた。	<b>②きっかけ</b> 私の発音はアクセントやイントネーションが違っていると気づいた。アルバイト先でも「西瓜」は果物、「スイカ」はカードと発音を直され、練習した。
	<b>1. 勉学上の壁</b> 研究のテーマがなかなか決まらず、試験の2ヵ月前くらいにやっと決まった。それまで何をやりたいのか全然わからず、また、日本語で、どう表現したらいいかわからなかった。試験1ヶ月前になって、別科の先生たちに早く書くように促された。もともと性格的にのんびりしているので、「早く早く」と言われても何もできなかった。テーマが明確でなかったから。いくら焦っても何もできない。だから辛かった。	<b>③努力工夫</b> 先行研究を5ヵ月間ずっと読んでいた。読んでいくうちに、言葉の使い方などが分かるようになってきた。 <b>④援助要請</b> また、別科の先生に見せて直してもらった。先生も資料を紹介してくれた。感動した。 <b>③努力工夫</b> 自分が頑張らないといけないと思った。手伝ってもらっても、自分で考えないと、結局とんでもない研究になる。
	<b>1. 勉学上の壁</b> 研究計画書を書きながら、専門の勉強をした。先輩に教えてもらった本をずっと読んでいた。何回読んでもあまり覚えられなかった。	<b>③努力工夫</b> 口に出して言ったり、書いたりして繰り返すうちになんとなく覚えた。
大 学 院 生 活	<b>1. 勉学上の壁</b> 大学院は、1週間ごとに同じ論文読んで、順番になったら、発表する。自分の意見・分析を言わなければならないので、難しい。それから大学院に入ってから、発音を矯正されるとは想像できなかった。大学の時は発音の勉強はほとんどしなかった。	<b>②きっかけ</b> ゼミの先輩ばかりではなく、他のゼミの先輩も発音を直してくれる。運がいいと思う。大学の時、矯正する時間がなかったのも、良かったと思う。

<p><b>2. 人間関係上の壁</b></p> <p>別科の時に比べると、深い関係ではない。博士課程の日本人の先輩とはよく遊び、発音を直してもらうが、同期生はみんな他の国の人。その国のことばで話していて、時間もバラバラなので、話す時間がない。一緒に遊んだことがない。</p>	<p><b>⑤その他</b></p> <p>大学院に入ったら、友達が簡単にできとは思っていない。想定内だ。</p>
<p><b>2. 人間関係上の壁</b></p> <p>「大学院に合格しないで帰国したらすごく恥ずかしい」と親に言われた。大学の時、経済を選ぶように言われたが、日本語を選んだ。その時は、日本語が普及していなかったので、将来が見えないという感じだったので、せめて「英語を選んで」と親に言われたが、日本語を選んだ。6年働いてから留学する時も、「なぜ、大学卒業後すぐに行かなかったのか」と言われた。寂しい時、疲れた時も親には相談しない。自分の気持ちは理解してもらえないと思う。いつも心配しすぎて、相談したら、もっと心配させる。「疲れた」というと「なぜ留学したのか」と問い詰められるから。</p>	<p><b>③努力工夫</b></p> <p>チョコレートを食べたりビールを飲んだりして、他の人にもあまり相談しない。</p>

#### 4.7 調査協力者 G の事例（20 代前半 女性 非漢字圏 M1）

〈日本留学・大学院進学の間緯について〉

両親が日系企業で働いていて、いつも日本の情報が入ってきて、日本が好きになった。大学の専門は日本語。家族に「日本の大学院で修士を取ると国でいい仕事が見つけられるから、留学してほしい」と言われた。1年間、日本で日本語学校に通ったが、日本語学校の先生はいつも専門学校を勧めた。自分の場合、大学院に行きたかった。しかし、情報をもらえない

まま、大学院の試験が終わってしまった。もっと日本語を勉強して大学院に入ろうと思った。

	困難点	克服法
別科在籍中	<b>1. 勉学上の壁</b> 最初は、ビジネスが母国で人気があるので、国際銀行をテーマにした。しかし、基礎がないので、研究計画書がなかなか書けなかった。	<b>⑤その他</b> 大学の専門で、基礎がある日本語の内容で書くことにした。
	<b>1. 勉学上の壁</b> 研究計画書を書くときにいろいろな論文を読まないといけない。読めない漢字が多いから、時間がかかった。母国の大学では、日本語が専門だったが、論文の書き方についての科目がなかった。卒業論文も書かなかった。日本語の試験だけだった。	<b>④援助要請</b> 銀行についての論文が書けないので、母と先生と相談のうえ、日本語についての論文を書こうと思った。
	<b>1. 勉学上の壁</b> 受験勉強は、アルバイトのある日は大変だった。自分で大学院の学費を出すため、アルバイト代を貯めた。睡眠時間は1日4～5時間。勉強時間が取れなかった。	<b>③努力工夫</b> 1回受験に失敗してから、もう1回やってみたいと思った。まだ帰りたくないと思った。目標が大学院だったので、それまでの3年間の3年間でいいと思った。失敗してから、本気でやった。ぎりぎり大学院に入れた。
別科在籍中	<b>2. 人間関係の壁</b> 家族のプレッシャーは結構あった。「日本で進学しなさい」とずっと前から言われた。父はできればという感じだったが、祖母からずっと言われた。祖母は勉強したいと思ってあまり勉強ができなかった世代なので孫たちには勉強してほしいと願っていたと思う。祖母の世代は経済的な問題で進学ができない人が多く、特に田舎出身者は進学がなかったそうだ。私は祖母と一緒に寝ていたので、寝	<b>①時間</b> 今大学院に合格して、祖母とも離れているので、プレッシャーは無くなった。

	<p>るまでずっと日本のことを話していた。国では、日系企業が多く、日本人も多いので、日本の観光地のテレビ番組やニュースも多い。祖母は一度も日本へ行ったことがないのにニュースだけ見て、判断している。プレッシャーは大きく、辛かった。</p>	
大学院生活	<p><b>1. 勉学上の壁</b> こんなに発表が多いとは思わなかった。7月は、発表の前に自分のパソコンが壊れたので、毎日学校に行って学校で準備した。レポートもあって本当に大変だった。</p>	<p><b>④援助要請</b> 同じゼミの違う国の先輩で、私の母語が分かる人がいる。一緒に話せるので、何でも相談できる。ゼミが一緒の日本人の友人とも結構親しい。指導教官の先生にも相談する。</p>

#### 4.8 調査協力者 H の事例（20 代後半 女性 非漢字圏 M2）

〈日本留学・大学院進学の間緯について〉

4 か月の日本への短期留学が好印象でもう一度留学を決意する。大学院進学を志望したのは、夏休みの帰国後、父親に相談してからのことだったので、スタートが遅かった。

	困難点	克服法
別科在籍中	<p><b>1. 勉学上の壁</b> 大学院受験を決意したのが、遅かったので、明らかに時間が足りないのに加え、研究計画書作成、別科の勉強、N2 の勉強の3つをこなさなければならず、忙しさで、ストレスがたまった。</p>	<p><b>③努力・工夫</b> 他の人の論文をよく読むことで自分のアイディアを出すようにした。</p>
	<p><b>1. 勉学上の壁</b> 最初は、研究のテーマが決まらず、アイディアを出すのが難しかった。論文の書き方は、国で卒業論文</p>	<p><b>④援助要請</b> インターネットや図書館で調べ、他の人のまねをすることで、学んていった。</p>

	<p>を書いていないので、よくわからなかった。受験前に指導教官を探さなければならなかったが、自分の研究にあった先生が見つからなかった。</p>	<p>③努力・工夫 時間がないので、とにかく研究計画書を書いて、先生に間違ったところを直してもらうことで、2ヶ月間で完成させた。</p> <p>②きっかけ インターネットのサイトで、自分の研究に一番近い先生を見つけ、面談したが、そのことで一応納得がいった。</p>
	<p>1. 勉学上の壁 大学時代の専門と違うため、専門の本を読んだが、全然わからなかった。また漢字も多く、難しかった。非漢字圏出身なので、書くことが大変だった。</p>	<p>③努力・工夫 母語の基本用語・論文・サイトを読んで母国語で理解すると同時にニュースをよく見るようにした。</p>
	<p>1. 勉学上の壁 大学院に合格しなかったら、N2に合格しなければならぬ。母国に帰ってN2がなければだめだと考える。</p>	<p>②きっかけ ストレスがあった時、音楽を聞く、フィットネスジムに行く等の他、銭湯で、年配の人と話すことで解消した。</p>
	<p>1. 勉学上の壁 テーマが何回も変わった。だんだん時間が少なくなって、書くのが難しいと思った。</p>	<p>④援助要請 先生に相談し、先生のアドバイスがあって、解決した。</p> <p>③努力・工夫 自分でコントロールするしかないと思っている。</p>
<p>大学院生活</p>	<p>2. 人間関係構築上の壁 大学院のゼミは、男性ばかりで、女性自分一人。ゼミの人たちはあんまり話しかけないから、たぶん外国人が嫌いなんじゃないかと思う。皆は冷たい。皆、ロボットみたいにアカデミックなことだけを言う。</p>	<p>④援助要請 先生と話す。先生は考えが広いから。また、他の研究科の外国人と話す。</p> <p>③努力・工夫 気にしない。大丈夫。それが男性のスタイルだと思うようにする。</p>
	<p>2. 人間関係構築上の壁 イスラム教を信仰しているので、食べるものが面倒だと思われがち。また、他の人に自分の体のことで面倒をかけたくない。</p>	<p>③努力・工夫 食べられない時は食べられるものを食べればいい。問題ない。 自分で自分を守るため、睡眠を十分にとって、元気である。健康に気をつけている。</p>

#### 4.9 調査協力者Iの事例（30代 女性 非漢字圏 M2）

〈日本留学・大学院進学を経緯について〉

大学は日本語専攻で、大学時代に6か月の日本への短期留学をした。大学卒業後、母国で日系企業に就職。4年ほど働くが、急に母国の支店がなくなることになり、いい機会なので、もう一度留学しようと考えた。せっかく日本にいるのだから、大学院で勉強したかった。また、親からも大学院へ行ってほしいと言われた。

	困難点	克服法
別科 在籍中	<b>1. 勉学上の壁</b> 別科に入学したころは、自分は何を研究したいか分からなかった。5月にテーマを決めて、6月にまた変えた。	<b>④援助要請</b> 先生に相談して早くテーマを決めたほうがいいと言われた。 <b>③努力・工夫</b> 自分からも頑張らないといけないと考えた。 <b>②きっかけ</b> その時、周りのみんなは研究したいことがわかっていたから、自分も急いで考えないといけないという感じだった。
	<b>1. 勉学上の壁</b> 最初は友達がいる国立の有名大学院を目指すのが、難しすぎてやめた。	<b>④援助要請</b> 就職しやすいから、みんな有名大学院に行きたがる。しかし、自分の研究テーマや先生の論文を見て、大学院を決めなくてはいけない。どこでも同じ。一度、沖縄にいる自分の大学の先生に相談。母語で相談できたので、わかりやすかった。
	<b>1. 勉学上の壁</b> 最初は研究計画書の書き方が分からなかった。	<b>②きっかけ</b> 別科の先生が、「研究計画書の書き方」の本を紹介してくれて、それを見て深く考えた。

		③努力・工夫 同国人の日本語で書いた先行研究を読んで、真似して書いた。
	1. 勉学上の困難 大学の専門は日本語で、大学院の専攻と違うから、難しいと思った。	③努力・工夫 辞書みたいな言葉の本で勉強した。全部読み、試験に出そうな単語を自分でまとめて暗記。過去問も夏休み前に見た。
大学院生活	1. 勉学上の壁 思った通り大変であると感じている。大学院は、自分で勉強してレポートを書き、発表をする。日本語を理解することは大変。論文を読むときは何回も何回も読まなければならない。漢字も多い。	③努力・工夫 最初は、内容を間違えないように一つ一つ調べる。論文で使われる言葉や教育で使われる言葉は大体同じ。母語でも調べる。もし文章で合わない場合は、日本語で調べる。アプリでも調べてみる。

## 5. 「困難点」についての分析結果と「克服法」についての提案

### 5.1 別科在籍中の勉学上の困難点と克服方法

ここでの困難点はテーマの決定と専門の勉強である。特に大学での専門と大学院での専攻が異なる場合、基礎がないために研究計画書の完成までに時間を要し、また、専門用語も覚えられないといった困難が伴う。

専門を変えた調査協力者は4名がいたが、そのうち1名については、途中で大学での元の専門に戻っている。例えば、心理学と教育学、商学と経済学のように共通項目のある分野での変更は比較的成功するが、分野が違う場合、例えば、言語学から経済学のような場合は、時間的余裕がなく、途中で変更せざるを得なくなる。また、日本語能力も影響してくる。専門を変える場合、指導する側は、学生の日本語能力を考慮したうえで、アドバイスを行わなくてはならない。

次に、指導教官との面談の重要性について考える。調査協力者Aは、研

研究室訪問で指導教官と面談することで、専門を変えたことで生じた疑問を解消している。しかし、Eの場合は、願書を出願してから指導教官とコンタクトをとったため、研究室訪問が叶わなかった。かえって、不安が増し、コンタクトをとったことが逆効果になったと考えられる。留学生は、完璧な研究計画書でないと指導教官と会えないと考えることが多いようだが、早めに大学院説明会に参加する、指導教官に会うなどして、アドバイスをもらったほうが効果的なのではないだろうか。

次に、勉学上の壁として複数の留学生が挙げていた研究計画書の書き方について検討する。日本語での論文の書き方について、基礎的なことを大学で学んでいない場合、困難が伴う。大学時に卒業論文を書いたことがない、あるいは、卒業論文の分量がかなり違う、形式自体が違うといったケースがあった。

こういった場合、EやHは、インターネットで、自分のテーマと同じような論文や論文の書き方が載っているページを探し、真似して書いている。Iのように同じ国の出身者が日本語で書いた論文を真似して書いてみるといったことで克服した学生もいた。

別科の大学院進学クラスではスケジュール作成以外、特に宿題などは課していない。今後は同国人が日本語で書いた論文を検索させ、要約させる等の宿題の工夫も必要ではないか。

## 5.2 別科在籍中における人間関係構築上の困難点と克服法

大学院合格までは、家族の意見が強く、また、家族と意見が合わず、対立する留学生もいた。BやGのように「祖母からのプレッシャーがかなりあった」と語った留学生もいた。留学生の出身国においては、3世代が同居する大家族も多く、日本の学生より祖父母との接触も多いことから、このような事例があるのではないかと考えられる。また、何か困ったことがあった時に相談する相手は、母国の友人や日本にいる同国人で、家族には



相談しないケースがあった。Eは心配をかけまいとして、Fは家族と意見が合わず、家族の心配がプレッシャーになっているため、相談しないということだった。

別科在籍中は、「クラスが楽しかった」と振り返る留学生が多かった。別科では、ほぼ全て同じ授業を受け、濃密な人間関係が構築できるためではないか。また、AやIのように落ち込んだ時やスローペースになった時、周囲の友人の様子を見て、自分のペースを取り戻した例があった。別科のクラスは、ペースメーカーの役目を果たしていると考えられる。

### 5.3 大学院生活における勉学上の困難点と克服法

別科在籍中とは違い、個人の発表の機会が多く、自分の意見を積極的に述べるといった大学院の授業方法について大変だと留学生は感じているようだ。これについては、「入学前のイメージと一致している」「想定内」のようである。膨大な資料を読み込むため、漢字を含む日本語力が必要となってくる。また、大学の時の専門と違う、あるいは、新しい分野の研究に取り組む場合も困難が伴う。

克服法としては、アプリなどの機器を使用しながら、「効率的に調べる」、「要約して、理論化する」など、知的作業もしているが、「人に相談する」という方法を取っている留学生もいた。先生・先輩・他の研究科の人という場合が多く、同じゼミの留学生にはあまり相談しないケースが目立った。

### 5.4 大学院生活における人間関係構築上の困難点と克服法

本別科在籍中よりも友達ができないと語る留学生が複数いた。同期生に同国人の友人がいないA・E・Fの事例、同性の友人がいないHの事例などがあった。大学院では、授業形態や人数が本別科と異なることから、このような状況になると考えられる。困難点があるとき、彼らは、指導教官

の先生の他、同国人の先輩や他の研究室の学生・国の友人に相談し、解決している。同国人や同性がいなくても、同期生で友人関係が構築できるようになるのが望ましいが、現状はかなり困難な状況である。

## 6. 今後に向けての改善案

本稿において、大学院生の振り返りインタビューから、留学生が別科在籍中及び、大学院生活での困難点について分析し、克服方法について考えてみた。調査の結果、大学院生の受験時や現在の生活の困難点、克服法が明らかになった。指導側が気づかなかった点も多く指摘されていた。

留学生の専門と教員の専門が違う場合、アドバイスがどうしても限られてしまう。特に日本語教師の場合、言語系・教育系など、専門が偏っているため、理系や芸術系・体育系の学生の扱いに慣れていない。このような留学生の場合、専門を同じくする、あるいは母語で相談できる先輩の存在は大きい。

今後は、引き続き先輩を招いた研究計画書の書き方講座を設けるとともに、先輩と気楽に相談できるネットワークの構築が求められるだろう。具体的には、SNSを使った相談ネットワークを作る、あるいは後輩への受験のアドバイスを盛り込んだビデオレターなどが考えられる。

また、図書館に、大学院生による相談コーナーを定期的に設けている大学もあるが、留学生の大学院生によるそうした相談コーナーがあると望ましいのではないか。

その他、今後は大学院と連携したガイダンスを早期に開催し、別科生に大学院のイメージを具体的に培ってもらうことも重要である。別科生たちは抽象的なイメージしか持っていない場合が多く、研究テーマを決められない場合がある。大学院ガイダンスにおいて、大学院教員と直に話すことで、大学院入学への意欲が高まるのではないか。

先輩や大学院との連携も大事であるが、最も重要であるのは、教員との十分な時間をとった相談や教員からの励ましである。別科生たちの受験時の悩みや要求を聞き、困難な状況でも乗り越えていけるよう支援していくことが求められている。大学院生たちの語りから、研究計画書が書けない時、ただ急かしたり、書き方を教えるだけでなく、時には待つことや寄り添うことが必要なのではないかということが示唆された。日々の限られた授業の中では難しいことだが、今後の指導に生かしていきたい。

また、今回は大学生による振り返りインタビューであったが、別科在籍中・大学院修士1年目・2年目・修了後というようにそれぞれの時点で複数回調査を行う縦断的調査ができれば、今回の調査では捉えられなかった困難点や克服法も更に明らかになるだろう。

今後の課題としたい。

### 《注》

- (1) 拓殖大学別科日本語教育課程では、平成26年度から、前年までの春入学の1年コースに加え、秋入学の1年半コースを増設させた。年2回学生募集をすることにより、学生数も増加した。
- (2) 拓殖大学別科日本語教育課程の旧名称。平成29年度より、現名称に変更した。
- (3) 菅長・中井（2017）で、分類しきれなかったケースを本データでは「⑤その他」として分類している。菅長らが分析の対象としているのは、国費学部留学生のため、奨学金が充実しているので、経済的困難点はなかったというが、本稿では経済的な困難点や、あきらめてしまったケースなどを個々に分類した。

### 参考文献

- 大谷尚（2007）「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案——着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』54-2
- 大谷尚（2011）「SCAT：Steps for Coding and Theorization——明示的手続き

- で着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法——」『感性工学』Vol. 10 No. 3
- 小田珠生・大森弦史（2016）「東京工芸大学美術学部の留学生在大学生活で抱える困難について——インタビュー調査から——」『芸術世界 東京工芸大学紀要』22 東京工芸大学芸術学部
- 河原太郎・森美千代他（2016）「大学院進学にあたり大学生はどのような困難を抱えているか？——「アカデミックコンテスト」を通じた意識の変容に着目して——」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』62 中国四国教育学会
- 財団法人日本語教育振興協会（2010）『日本語教育機関学生の大学進学のための指導事例集』財団法人日本語教育振興協会 大学院進学・環境整備プロジェクト
- 菅長理恵・中井陽子（2017）「エピソードから探る学部留学生の困難点と克服方法——予備教育の果たすべき役割——」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』43 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 張瑜珊・原田三千代（2009）「研究生のための『アカデミック日本語教室』の試み——協働で学ぶ研究計画書作成——」『言語文化と日本語教育』37 お茶の水女子大学日本言語文化学会
- 出相泰裕（2016）「職業人の大学院進学に向けての決断課程——K大学専門職大学院ビジネススクール在学生へのインタビュー調査から——」『高等教育研究』19 大阪教育大学
- 中國博美（2006）「島根大学の学部留学生の関する一考察——留学生生活の困難点を中心に——」『島大言語文化 島根大学法文学部紀要言語文化科学科編』20 島根大学法文学部
- 原田三千代（2014）「中国母語話者留学生の研究に対する態度構造の分析——大学院進学予備教育における持続可能性日本語教育に向けて——」『桜美林言語教育論叢』9 桜美林大学
- 藤井桂子・門倉正美（2004）「留学生は何に困難を感じているか——2003年度前期アンケート調査から——」『横浜国立大学留学生センター紀要』11 横浜国立大学留学生センター
- 満都拉（2012）「中国の大学生の大学院進学意識に関する研究——北京の大学の調査結果から——」『日本教育社会学会大学発表要旨集録』64 日本教育社会学会
- 宮城幸枝（2003）「学部留学生の学習上の困難点を探る——留学生の学習・指導に関するアンケート調査の分析を通して——」『東海大学紀要 留学生教育センター』23 東海大学

吉村淳代（2013）「大学院進学希望者に対する授業の取り組み」『独立行政法人  
日本学生支援機構日本語教育センター紀要』9 独立行政法人日本学生支援  
機構日本語教育センター

吉村淳代（2015）「大学院進学希望者の情報収集能力——研究計画書の作成を目標して——」『独立行政法人日本学生支援機構日本語教育センター紀要』11  
独立行政法人日本学生支援機構日本語教育センター

#### 参考ウェブサイト

文部科学省『平成 29 年度学校基本調査概要』

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/1268046.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/1268046.html)  
(2017. 10. 01 閲覧)

日本学生支援機構（JASSO）『平成 28 年度外国人留学生在籍状況調査結果』

[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/index.html)  
(2017. 10. 01 閲覧)

（原稿受付 2018 年 1 月 29 日）